

# 現場へ!

## 「水子は家系に」だから供養

### 女性とからだ②

マイクロバスを降りて辺りを見渡した私は、息をのんだ。山の斜面いっぱいには数え切れないほどの地蔵の列が並んでいる。1体ごとに添えられた風車は、風のある場所だけが静かに回っていた。

東京・池袋から電車とバスを乗

り継いで片道3時間。昨年12月、埼玉・秩父の山奥にある「紫雲山地蔵寺」を訪ねた。中絶した胎児や流産児の供養で有名な寺だ。階段を上って、地蔵群に近づく。地蔵に刻まれている都道府県名を見ると、全国から水子供養に

訪れていることがわかった。寺のホームページによると、地蔵は大ききによって15万円、18万円、23万円の3種類。文字の彫り込みはオプションでお金がかかる。「人間の体は肉体が先か心か……」。山頂付近のスピーカー

から、住職の説教が聞こえた。この日の法要は6回だ。次の回に間に合うように本堂に足を運んだ。



休憩所では、10人ほどの高齢の女性たちが、お茶を飲んだり菓子をつまんだりして会話していた。

千葉県に住む60代の女性は、数年前から毎月、法要に来ていたという。「嫁ぎ先と自分の実家、姉の夫の実家の分も含めて、お地蔵さんを4体建てました」

自らは子どもの中絶経験があるわけではないという。体の不調や家業の問題をきっかけに知人の紹介で来たところ、再検査で悪いところが消え、「信仰心のおかげだ」と思ったのだという。

4、5人に声をかけたが、「中絶をしたことがある」という人は1人しかいなかった。ただ、「家系をさかのぼれば、必ず1人は水

子さんがいる。だから供養しなければならぬ」と言うのだった。「水子供養はお願いするのではなく、おわびするのです」と横本泰雄住職(80)。「中絶された胎児は憤りが強い。生きている人のおわびと供養によって成仏する」

法要では、供養に訪れた人が住職と一緒に般若心経を唱えた後、オリジナルの「水子供養の歌」をよんだ。「父母が水子をつくる

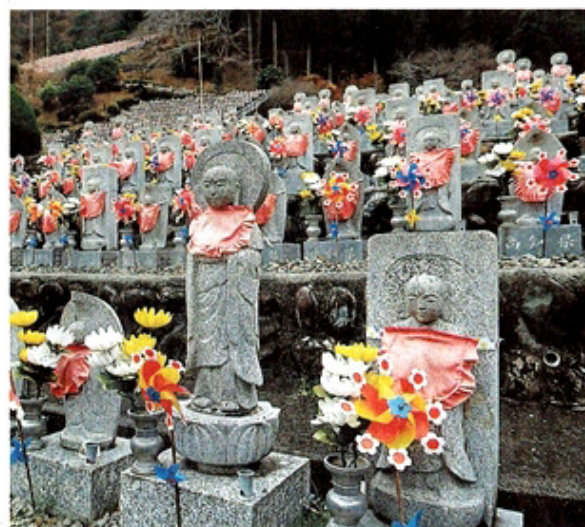
とき、体のあちこちが悪くなったり子どもが親に反抗したりするようになる」という内容だ。読経は、「おわびします」と2回唱え、「良い再生」を祈って終わった。



供養寺は、全国に広がった。

初代住職の故横本常馬氏は政治評論家でもあり、中絶が認められている「優生保護法」(当時)の廃止を訴えていた。落慶式には、横本氏と親交のあった当時の佐藤栄作首相も列席。「開創三十周年記念誌」には、71年に佐藤首相が寄せた「讃仰の辞」が載っている。優生保護法制定から約3千万の胎児が中絶されたことを見越してのことへの反省が記され、「私たちの自民党はそろそろ優生保護法の改正に着手する」とあった。

翌72年、同法の中絶要件にある「経済的理由」を削る改正案が国会に提出された。この文言は、幅広い中絶を容認していると指摘されていた。改正運動を後押ししたのは、新宗教「生長の家」で活動していた故村上正邦氏(後に参院議員)だった。当時、「人間神の子」を唱える「生長の家」は、中絶に反対していた。(杉原里美)



山の斜面一帯に約1万5千体の水子供養が並ぶ紫雲山地蔵寺。地蔵には風車が供えられている=いずれも埼玉県小鹿野町



- ② 毎月の法要日には、お経と「水子供養の歌」がよみ上げられる
- ③ 紫雲山地蔵寺本堂の前にある水子供養尊は胸に赤ん坊を抱き、足元にも赤ん坊が寄り添っている